

釣れ釣れなるままに

2006年思い出の釣行記 PART. 6

幻想的な光

鹿島釣狂

釣行日 7月15日(土)

入釣場所 湯泊岬

天候 晴れ

釣果 ニジマス 32cm以下 5

クロゾイ 27cm以下 4 シマゾイ 31cm 1 ガヤ 12

幻想的な光に

15(土)、16(日)、17日(海の日)と3連休である。北海道上空に寒気団が入り込み雷や豪雨を伴うという不安定な天気予報である。故に予報も外れやすく、朝のうちは雨雲が低く垂れこめていたが、その雲行きがよい意味で怪しくなってきた。10時頃には晴れ間も覗いてきたので、雄冬に釣りに行くことにする。

12時から午後3時までの間、途中徳富川に寄り道し、ニジマスを狙った。徳富川は、以前、漁業組合がニジマスやヤマメの放流に手がけており、川に漁業権を設定して、入渓者から遊漁料を徴収していた川である。現在は養殖事業から撤退しているがその時の居残りが自然繁殖し、時折大物の便りが聞かれる。また、友人からは最上流域で野営しながら、大物イワナを仕留めた話を聞かされてもいた。現在、北幌加地区上流で徳富ダムを建設中であり、今後の河川の変化と渓魚の動向が気になる場所である。

私は、少年時代にこの徳富川で釣り糸を垂れたことがある。下流域だったので主な釣りものはウグイや時たま釣れるヤマメだったが、大雨後でも濁ることの少ない岩盤底の流れが印象的な川である。

「ゆく川の流れば絶えずして、しかも元の水にあらず」

鎌倉時代の歌人、鴨長明^{かもちやうめい}は、晩年に日野山に隠れ、方丈の庵を結んだ。この言葉はその生活と心境を記した随筆「方丈記」によるものである。流れゆく川の水が絶えることはないが、その水は決して今流れたもとの水ではなく、次から次へと続く新しい水なのである。水の流れに目をやる人の命は何ともはかないが、時の流れのなんと悠久であることか。

南幌加橋より砂利取り現場までの4 kmほどを釣り上げる。深い淵ではアタリが出ず、大物には巡り会えなかったが、流れの速い瀬脇でポツン、ポツンとニジマスが出て、小物ながらその強い引きを堪能した。



午後6時には湯泊岬に着いた。湾洞の中央に向かってウキを飛ばしておく。そして、引き釣り仕掛けで、サンマ、オオナゴ、イカゴロを引く。辺りが薄暗くなり始めた頃、ガツガツとアタリが出る。31 cmのシマゾイがサンマを啜ってあがってきた。その後、ウキ釣りにガヤのアタリが頻繁に出るので、引き釣りは置き竿状態になってきた。ウキの方にはガヤを中心にクロソイがポツンポツンと出た。

後から入った釣り人が岬先端でウキ釣りをしている。そのウキ釣り仕掛けに緑色の発光体が2秒おきぐらいにチカッ、チカッと光っている。そして、その仕掛けを投げ入れてからゆっくりと引いている。彼の動作から何某かの釣りものがあるようだ。何を釣っているのだろう。

訪ねてみると、旭川からイカを狙ってやってきたということである。4号の竿でテラー仕掛けを遠投している。ウキは発泡スチロール性の手作りで、赤いケミカルライトが内蔵され誘導式になっている。ウキ下は3ヒロとっており、プラスチック製の緑色発光体でイカを寄せている。テラー仕掛けにはソーダーガツオやアカハラを針金でくくりつけているという。

そう説明を受けている間にも、ウキが消し込み胴長20 cmほどのマイカがかかってくる。釣り上げたときは興奮状態で赤褐色だが、それが銀白色に変化し、様々な色に光り輝く円い斑紋がポワッ、ポワッと浮き出て幻想的なものだ。しばらく見学させてもらって、彼が釣り上がるときには18パイのマイカがクーラーボックスに収まっていた。



湯泊岬左先端

釣行日 平成18年7月22日(土)
入釣場所 湯泊岬左先端
天気 曇り べた風 背後から弱い風
釣果 真イカ 胴長20cm 11ハイ

帯に短し、タスキに長し

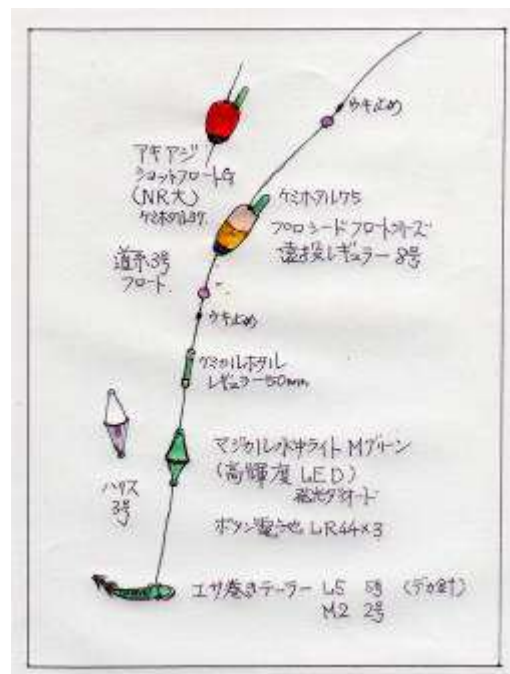
イカ釣りの光景が脳裏に焼き付き、自分もその感触を味わいたいということで出かけた。午前中に釣具店で旭川の御仁が使っていたと思われる仕掛け等をそろえ、午後5時には砂川を発った。湯泊岬へは浜益経由だと9.8kmだが、北竜・増毛経由では9.2kmであった。

6時半、湯泊岬に着いた。クーラーボックスや仕掛け等をリュックに入れたが、その荷物が一步一步に力を込めなければならない大会の磯釣りと比べると大変軽いのでヒョイヒョイと歩みを進めることができた。しかし、イカ釣りは初めてで、その仕掛けの準備に戸惑い、薄暗くなってから(7時半)の第1投だった。

手持ちの2号の磯竿に旭川の御仁を真似た仕掛けを付けて遠投に心掛けるが、竿が軟弱で飛距離が出ない。3号竿に替えてみると2号よりは幾分マシになった。4号、5号という磯竿があるのなら、それに越したことはないと思う。

8時半に1パイ目が来た。投げ入れてからすぐには引かずに待っていると、ウキではなく海中にある発光体が横になびいているので初めてアタリだと分かる。ウキは鮭釣り用に開発された「プロシードフロート遠投8号」である。ウキの浮力が大きすぎるのでイカが乗っても消し込むようなアタリは出ないのだ。

とにかく1パイ目がきたことで改良点が見つかる。市販のテーラー仕掛けセットに付いていた2号棒ウキに替えてみると、テーラーや発光体の重みに負けて沈んでしまった。ウキと仕掛けの微妙な調節が必要なのである。ウキをソイ釣りで試していた「アキアジショットフロートG」に替えてみると、フカセ釣りのようになり、仕掛けを引いているときはよいのだが、止めてしまうとゆっくりと沈んでしまう。テーラー仕掛けを5号から3号に落とし、発光体を軽いものに替えてみると、ウキと仕掛けのバランスは何となくしっくりとしたものになったが、今度は視認性と遠投性に欠けるようだ。「帯に短しタスキに長し」というところか。



「帯に短しタスキに長し」で極力遠投に心掛けて引いていると、10時頃より潮が動いたのかイカがパタパタと来た。イカは赤色発光体より緑色発光体の方を好むようだなと思っていると、緑色発光体が突然光らなくなった。岩に当たったのが原因でフィラメント切れや接触不良等のトラブルが起きたのだろうと思っていたが、家に帰ってから、電池を交換してみると異常のないことが分かった。購入時にはすでに電池が消耗していたと思われるが、確かめる方法が見当たらない。また、説明書を読むとフィラメントではなくダイオード仕様で球切れは無いということだ。大きな75mmのケミカルライトで代用できないかと試釣したが、効果の程は分からない。

仕掛けを引いているときにグッと重くなるような感触がアタリである。軽くあわせて、その後は道糸を弛めないようにゆっくりと引き寄せる。鮮明なアタリや、グイグイと竿を引き込むような力強さが欲しいと思っていると、また、アタリがピタッと止まってしまった。煌々と闇夜を照らしていたイカ釣り船も岩老漁港に帰ってきた。1時頃に来たイカを最後として、道具を片付けた。クーラーには11パイのイカが収まった。

港でのイカ釣りは何度か見てきたが、その混雑ぶりや発電機等の装備、そしてギャングバリでの引っかけ釣りなどを目の当たりにして手を出せないでいた。今回、ひよんなことから岩場でのイカ釣りに手を染めたが、更に工夫を重ねることで、より手軽にイカ釣りを楽しめることができるかも知れないと思いながら帰途についた。